慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『顕注密勘』考：顕昭注と『和歌色葉』との関わりをめぐって
Sub Title	
Author	新田, 奈穂子(Nitta, Naoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	三田國文 No.61 (2016. 12) ,p.13- 30
JaLC DOI	10.14991/002.20161200-0013
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20161200-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『顕注密勘』考

――顕昭注と『和歌色葉』との関わりをめぐって――

新田　奈穂子

序

『顕注密勘』は顕昭の「古今秘注抄」に定家が注を加えた歌学書である。以下、本稿では顕昭注を顕注、定家注を密勘と呼ぶ。

顕昭が生涯のなかで、いくつ古今集の注釈を執筆したのかはわからない。全体像がわかるのは、今回取り上げる顕注と、文治元年（一一八五）成立の『古今集注』のみだが、歌語については『袖中抄』にまとまった注が見られる。

顕昭の古今集注釈について考えるとき、『古今集注』の奥書に「大略釈奥義外歌。」とあるように、清輔の『奥義抄』との関係は重要な鍵となる。『古今集注』の場合は二六首例外はあるものの基本的には『奥義抄』加注歌を除くという方針で執筆していたと思われる。

一方顕注と『奥義抄』との重出歌についても、久曾神昇氏の調査が有り「奥義抄所載百十八首の九割二分以上が、本書に見出されるのであり、本書は奥義抄のを除いたとは考えられない。」と述べられている。実際『奥義抄』にあって、顕注には存在しない歌は八首のみで、顕注では、原則として『奥義抄』に注釈のあるものは注を付ける、という『古今集注』の場合とは正反対の方針であっただろうと考えられる。その結果、『古今集注』では三例見られた『奥義抄』説批判が、顕注では九例と三倍に増加する。

かつて私は、『中世文学』第五五号の拙稿において、おもに『奥義抄』『古今集注』には存在せず、顕注にのみ注釈がある四十（全体の約一割）を中心に検討し、顕注の成立は『古今集注』の成立より後であり、早くとも建仁元年（一二〇一）、おそらく建仁三年（一二〇三）成立の千五百番歌合以降であろうと推測した。

ではなぜこの時期に顕昭は新たに古今集注釈を執筆したのだろうか。

顕昭の他の注釈では、『袖中抄』に典型的に見られるとおり、『古今集注』『拾遺抄注』『後拾遺抄注』などの諸注でも、書物の引用するときは出典を、他者の説に言及するときは誰の説かを明確にしていて、根拠を明確して考察をすすめることが顕昭の方針であったと思われる。しかし、顕注では出典を明記せ

ず、顕昭自身の説かどうかもはっきりさせず、自他の区別があいまいなまま、和歌の説明として要領よくまとめているものが多く、これまでの顕昭の著作とは異なる方針のもとで執筆されている。

建仁元年（一二〇一）以降、おそらくは千五百番歌合以降、というこの時期に、顕昭は、なぜ『奥義抄』加注歌をほぼすべて含む古今集の注釈書―顕注を執筆したのだろうか。しかも、説の根拠を明記するという今までの注釈書の書き方とは、明らかに異なる方針で。このように顕注の特徴をまとめたとき、古今集注釈のところだけ比べると非常によく似た特徴を持つ歌学書が、建久年間に執筆されていることに気がつく。上覚の『和歌色葉』である。[4]黒田彰子氏『和歌色葉』の奥書にある通り、黒田彰子氏のまとめによれば、おそらく建久九年（一一九八）という大変近い時期に、顕昭は『和歌色葉』を閲覧している。

そこで本稿では、『和歌色葉』が顕注執筆のきっかけになったのではないか、と予想し、『和歌色葉』下巻の古今集注釈と顕注を比較検討していきたい。

Ⅰ　『和歌色葉』の古今集注について

一、『奥義抄』とほぼ同じか要約

『和歌色葉』は日本歌学大系の解題の指摘のとおり[5]『奥義抄』『和歌初学抄』に負う所が多く、また黒田彰子氏[6]の指摘の通り『奥義抄』に加え『童蒙抄』の影響を強く受けている。

そこで『奥義抄』の古今集注釈と比較したところ、『和歌色葉』下巻の古今集注釈六十七首のうち、『奥義抄』とほぼ同じか『奥義抄』の要約が三十五例と全体の約半数をしめ、また『奥義抄』説に何らかの説明を加えたものを加えると五十例になり、実に七割以上が『奥義抄』に拠っていることになる。

二、『奥義抄』に追加した説明に顕昭説を含むもの

『奥義抄』に何らかの説明を追加したものは十五例。追加された説明を他の歌学書と比較したところ、『童蒙抄』[7]に拠るものが三例、顕昭説を含むものは二例見られたので、顕昭説を含む二例について検討した。以下、傍線・点線などは、稿者が私に付したものである。

まず古今集一〇一三の「しでのたをさ」の注について。

古今集一〇一三

［和歌色葉］　五十いくばくのたをつくればかほとゝぎすしでのたをさをあさな〳〵よぶ

郭公の一の名をばしでのたをさと云ふ也。しでの山なり。郭公はしでの山よりきたりて農を催す鳥にて、過時不熟となくといふ義あれば、たをさとはよめるなり。あさな〳〵とは朝々也。又ほとゝぎすはもずといふ鳥の本名といへる事あり。かの鳥昔くつぬひにてありけるが、郭公の沓の料をとりて、いま四五月のほどにたてまつらむとて、すかしかくれにければ、それをたづぬとてよびあるくにより、この名をえたる也。

郭公なきつる夏のやまべには沓でいださぬ人やある

らん

さてもず丸はこゑたかくてきのすゑにをるとりの、四五月にやぶの中にことゞ〳〵しくとつぶやきをりといへり。

［奥義抄］　いくばくの田を作ればか郭公しでのたをさを朝な〳〵よぶ

郭公の一の名をしでの田をさといふ也。郭公はもずといふ鳥の本名といへる事あり。彼鳥むかし舄ぬひにて有けるが郭公の沓の料をとりていま四五月の程に奉らんとすかしてかくれにければ、それを尋ぬとてよびありくによりて此名を得たるなり。太皇后宮の百番の歌合云

郭公なきつる夏の山べにはくつで出さぬ人やあるらん

此心をよめるなり。

［袖中抄］　第十一　しでのたをさ

いくばくの　たをつくればか　ほとゝぎす　しでのたをさをあさな〳〵よぶ

顕昭云、しでのたをさとは、しづのたをさといふなり。ほとゝぎすは勧農の鳥とて過時不熟となくといへり。ときすぎばみのらじといふ義也。それがほとゝぎすとなくとはきこゆるといへり。たをさとは、田つくるものなり。しづとは、しづのをなり。されば、ほとゝぎすは、いくらばかりのたをつくれば、たをさをばつとめてことにはよぶぞとよめるなり。

催馬楽歌云、

いもがゝど　せながゝど　ゆきすぎかねてや　わがゆかば　ひぢかさの　あめもやふらなむ　しでのたをさ　あまやどり　かさやどりてまからむ　しでのたをさ

此しでのたをさは田つくるものなり。しづのたをさ也。しでとしづとは同五音なり。而を世の人しでのたをさとは、ほとゝぎすをいふ也。しでのやまよりきたりて農をすゝむればいふなりといへり。伊勢歌に、〈以下、「しでのたをさ」の用例など略〉

［顕注］　いくばくの田つくればか郭公しでの田長を朝な〳〵よぶ

しでのたをさとは郭公の一名也とふるき物にしるせり。ほとゝぎすは、しでの山より来りて農をすゝむる故に、しでのたをさといふといへり。其詞云、過時不熟となくが郭公と聞たる也と申。時すぎばみのらじと鳴云々。但、しでの田をさを朝な〳〵よぶといへば、しでの田長は別の物と聞ゆ。いかでか自の名をよぶべき。教長卿は、しでの山みなは男にてとあり。童蒙抄には、わらはにてこゆといへり。有難知事なれば不及沙汰。抑郭公はもずといふ鳥の本名也といへる事有。かのもず、昔沓ぬひにて有けるがほとゝぎすのくつでをとりて、いま四五月の程にたてまつらんとて、すかしてかくれにければ、それをたづぬとてよびありくによりて子規の名をえたる也。このよびあるくほとゝぎすは、もとのもず也。彼かくれありく鵙はもとのほとゝ也。太后百番歌合に

郭公鳴つる夏の山辺にはくつで出さぬ人やあるらむ

此心をよめり。此歌はくつでの事をば知ながら、後の名につきてほとゝぎすとは此よびありく鳥をよみ、沓手出さぬ人とは、かくれてあはぬ沓ぬひをよめる也。もず丸は秋は梢にてほこりなけど、四五月にはやぶにかくれてこと〴〵しくと、しのびになくぞ申す。もずのはやにえとてもろ〳〵の小鳥、かへるなどをとりて、うばら木のえだなどにさしておきたるは、郭公についしようせむとも申めり。

まず『和歌色葉』と『奥義抄』を比較すると、点線部は『奥義抄』に拠っていることがわかる。

次に『袖中抄』と『顕注』を比較すると、傍線部「しでの山なり。郭公はしでの山よりきたりて農を催す鳥にて、過時不熟となくといふ義あれば、たをさとはよめるなり。」は『袖中抄』と顕注に見られる顕昭説である。また、波線部「もず丸はこゑたかくてきのするにをるとりの、四五月にやぶの中にこと〴〵しくとつぶやきをりといへり。」は『和歌色葉』より後の成立である顕注に見られる。この点については、『和歌色葉』の説を顕昭が引用した可能性もあるが、二人の経歴を踏まえると、その可能性よりも、『和歌色葉』に先行する歌学書で現在確認できる著作には記されていない顕昭の考えと何らかの形で接していた上覚が『和歌色葉』にその顕昭の考えを記したため『和歌色葉』と顕注の記述が一致した可能性のほうが高いのではないかと考える。

以上のように『和歌色葉』の一〇一三の注は、『奥義抄』の説に、『袖中抄』や、後に顕注で記される顕昭の説を追加したものとなっている。

二例目、古今集一〇九二の「いなふね」について。

古今集一〇九二

［和歌色葉］　六十二もがみがはのぼればくだるいなふねのいなにはあらずしばしばかりぞ

このかはいではの国のたちのまへにながれたり。それより郡々のふねのいねをつみてのぼるに、かはのはやくしてのぼりてはくだり〳〵すれども、つゐにはのぼればかくよめり。或人云、河のはやくてのぼるふねのかしらをふれば、いなふねといふ也といへり。いかゞとおぼゆ。

［童蒙抄］　第三　地部　河

最上川のぼればくだるいな舟のいなにはあらず此の月ばかり

古今廿に有。此川出羽国のたちの前に流れたり。それよりこほり〴〵の稲をつみてのぼるに、川早くしてのぼりては下り〳〵して終にのぼりぬ。さればかくよめり。又云、川のはやくてのぼる舟のかしらをふるを、いな舟といふ也と云々。

［奥義抄］　もがみ川のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

此歌は普通はしばしばかりぞと侍る。もがみ川はたぐひなくはやくて、のぼる舟のかしらをふりてくだりくだりすれば、いな船とはいふなり。つひにはのぼりぬれば、しばしばかりぞと読りと或物にいへり。出羽国の住人の申しは

彼河すべてはやきことなし。たゞくらまの七まがり坂のやうに、とかくひぢをりてながれたれば、上れる舟の又くだる様によそにては見ゆるなりと申せども後撰にも

もがみ川ふかきにあら（傍へ）ずいな舟の心かろくもかへりける哉

とよめり。是はさきの歌の心にぞ侍る。河はさだめなき物なれば、むかしこそははやく侍けめ。

［袖中抄］第十二　いなふね

もがみがは　のぼればくだる　いなふねの　いなにはあらずこのつきばかり

顕昭云、いなふねとは、いねつみたるふねを云也。もがみがはゝ出羽国に最上郡あり。そのこほりよりながれたれば、もがみがはとはいへり。かの国の館のまへよりながれたり。そのかはよりこほり〳〵のものをばふねにつみて、たちにをさむれば、いねをもつみてのぼるなり。こほり〳〵のいなふねおほかれば、のぼりくだることかずしらねば、のぼればくだるとはいふ。いなといはむれふに、いなふねとはいふなり。ちかきよの人なれど故六条修理大夫の歌に

しぎのふす　かりたにたてる　いなぐきの　いなとはひとの　いはずもあらなむ　とよめる体也。

これを、もがみがはのきはめてはやくて、のぼるとすれどまたくだるなりといふは、ふるき義なれどいはれず。はやきかはなれど、さしのぼるは大事にこそあれ、またくだり〳〵することやはある。さほどならば、つなでもひくべし。またあまたさをゝとりてもさすべし。まことゝもおぼえぬ事也。このつきばかりといはむも、あまりにひさし。しばしばかりはといふは証本の説にはあらず。この歌は恋のこゝろにて、いなふねといひおきて、いなとにはあらず、この月ばかりえあふまじきぞ、月たちなばあはむといふにてこそあれ。ふねをこの月ばかりといふぞなどこゝろえて、のぼればくだるをもひとつふねのことゝいはゞあしかるべし。このかはゝ出羽の国よりみちのくにへながれいでたれば、陸奥歌にもよめるなるべし。よどがはゝやましろよりながれてつのくにへいで、よしのがはゝやまとよりながれてきのくにへいでゝこそはゝべなれ。又いなふねといふも、かはのはやくてふねのかしらをふればいなふねといふなど申すめり。**みぐるしきことなり**。〈以下、他注の引用など　省略〉

［顕注］最上河のぼればくだるいな舟のいなのあらずこの月ばかり

もがみ川のぼればくだるいな舟のとは、きはめてはやき河にてこほり〳〵よりのぼる稲つみたる舟の、のぼればのぼりやらでまたくだりくだりすれば、のぼればくだるいな舟とは云也。されど終にはのぼりぬれば、しばしばかりぞとはよむ也。こひによせてよめる歌にこそ。いね積みたる舟なれば、あふことをいなといふによせて、いな舟といへど終にあはむずるをいふに此月ばかりぞいなびんずるといふ心をよめる也。

又説いな舟とは、のぼる舟の河のはやさにかしらをふり

てくだり〳〵すれば、いな舟といふ。かしらをふる故に、いなのぼらじといはん心によせたる也ともいへり。此義げにとも聞えず。稲つみたるをいなふねといふをいなといふにそへてこそ、しばし許ぞともいへ、かしらをふるをさゝへていな舟といふべからず。

又説出羽国の土民の申けるは、彼川すべてはやき事なし。たゞくらまの七まがりの坂のやうに、とかくひぢをりてながれたれば、のぼる舟の又くだるやうに、よそにてはみゆるなりと申せども、後撰にも

最上河ふかきにあへずいな舟の心かるくもかへりける哉

ともよめり。是はさきの歌の心にてぞ侍。河はさだめなき物なれば、昔はこそははやく侍けめ。此土民の義いはれず。無下のつくり義也。又たとひ河ははやからぬ事ありとも、古今の歌に付て後撰ははやきにあへずとはよみ侍らざりけるやらん。河はふかきはのどかにこそみえ侍れ。又もがみ河は出羽最上郡よりながれいでゝ侍とかや。さてみちの国には北上と申とかや。

『和歌色葉』では、『童蒙抄』『奥義抄』に見られる説を「このかはいではの国のたちのまへにながれたり。それより郡々のふねのいねをつみてのぼるに、かはのはやくしてのぼりてはくだり〳〵すれども、つゐにはのぼればかくよめり。或人云、河のはやくてのぼるふねのかしらをふれば、いなふねといふ也といへり。」と述べた後、「いかゞとおぼゆ。」と批判している。

この「いなふね」の『童蒙抄』『奥義抄』説について、顕昭は『袖中抄』の中で点線部のように述べた後「といふは、ふるき義なれどいはれず。はやきかはなれど、さしのぼるは大事にこそあれ、またくだり〳〵することやはある。さほどならば、つなでもひくべし。またあまたさをゝとりてもさすべし。まことゝもおぼえぬ事也。」と批判し、点線部「いなふねといふも、かはのはやくてふねのかしらをふればいなふねといふなど申すめり。」について「みぐるしきことなり」と厳しく批判している。顕注のなかでも、「此義げにとも聞えず。稲つみたるをいなふねといふをいなといふにそへてこそ、しばし許ぞともいへ、かしらをふるをさゝへていな舟といふべからず。」と批判している。そこで上覚が「いなふね」の『童蒙抄』『奥義抄』説を批判したのは、『袖中抄』や顕注に見られるような顕昭の『奥義抄』説批判に接し、顕昭の考えの影響を受けていたからではないかと、推測する。

三、『奥義抄』と異なるもの

次に、『和歌色葉』の古今集注釈では『奥義抄』と異なる説明をしているものが三例[8]あるが、そのうち顕昭説と関わりが見られた二例について取り上げる。

1 『袖中抄』の顕昭説と同じもの

『和歌色葉』の注の中に『袖中抄』の顕昭説が見られる六三七を検討したい。

古今集六三七

［和歌色葉］　廿六　しのゝめのほがら〳〵とあけゆけばおの

がきぬぐ〳〵なるぞわびしき

しのゝめとはあか月也。ほがらとはほがらかなり。

［奥義抄］　しのゝめのほがら〳〵と明ゆけばおのがきぬぐ〳〵なるぞわびしき

万葉集には明々とかけり。明行心也。

［袖中抄］　第十五　ほがら〳〵　しのゝめ　いなのめ

しのゝめのほがら〳〵とあけゆけばおのがきぬぐ〳〵なるぞわびしき

顕昭云、ほがら〳〵とは、ほがらかに夜のあけゆく心なり。朗と云文字をかくなり。奥義抄に云、ほがら〳〵とは、万葉には明々とかけり。あけゆく心なり。

私云、万葉に明々とかきて、ほがら〳〵とよめることなし。如何。俗説にはしがらほがらといへり。其も証本共にさる事なし。しのゝめとは暁を云なり。古今歌、

〈以下用例　省略〉

［顕注］　しのゝめのほがら〳〵と明行ばおのが衣ぐ〳〵きるぞかなしき

ほがら〳〵とは、夜の明行心也。ほがらかを略してほがらとはいふ歟。或人、万葉集に、明々とかきてほがら〳〵とよみたりとあれど、万葉に此詞見えず、如何。又ふるき物に古今にほがらの詞なし、如何。しのゝめとは夏部にしるしたり。

『和歌色葉』では「しのゝめとはあか月也。ほがらとはほがらかなり。」と、『袖中抄』の「しのゝめとは暁を云なり」「ほがら〳〵とは、ほがらかに夜のあけゆく心なり。朗と云文字をかくなり。」や顕注の「ほがら〳〵とは、夜の明行心也。ほがらかを略してほがらとはいふ歟」と同じ説を述べている。「ほがらほがら」について、『袖中抄』・顕注ともに『奥義抄』説「万葉集には明々とかけり。明行心也。」を「万葉に明々とかきて、ほがら〳〵とよめることなし」と否定している。『和歌色葉』が六三七で『奥義抄』に拠らなかったのは、顕昭の『奥義抄』説批判と顕昭自身の説に接していて、その顕昭説を取り入れたためではないだろうか。

2　『古今集注』の顕昭説と同じもの

続いて『和歌色葉』の注の中に『古今集注』の顕昭説が見られる九一二を検討したい。

古今集九一二

［和歌色葉］　四十五わたのはらよせくるなみのしば〳〵もみまくのほしきたまつしまかな

わたのはらとは海也。或云、しば〳〵とはしばしなり。なみはやがてつづけてもたゝず、しばしはざまにありつゝたてば、しば〳〵といべりといふ、**いかゞときこゆ**。しば〳〵とはしきりなり。なみはたえずたつものなれば、しきりにもみまほしとそへいへるなり。しばなくとは数鳴とかけり。又はつとりのゝちにしきりになくをばしばどりといひ、舟ののちにさがりておほくこぐをばしばふねといへば、しば〳〵はしきりなるべし。ちどりしばなくといふが

ごとし

［奥義抄］　わたの原よせくる浪のしば〳〵も見まくのほしき玉津島かも

浪はやがてつゞけてもたゝず、しばしはひまありつゝたつなり。さればしば〳〵ありつゝといふ心にて波とおきてしば〳〵とはいふなり。しばらく見まくほしき玉津島哉と読り。このしば〳〵は時のほどにはあらず。久しくといふこころ也。万葉云、

郭公飛幡の浦にしく波のしば〳〵君を見むよしもがな

是もおなじ心也。

［古今集注］　ワタノハラヨセクルナミノシバ〳〵モミマクノホシキタマツシマカモ

清輔朝臣云、ナミハヤガテタダツゞケテタヽズ。シバシハザマアリツヽタツナリ。サレバシバ〳〵アリツヽトイフコヽロニテ、ナミトオキテシバ〳〵トハイフナリ。シバラクミマホシキタツシマカナトヨメリ。コノシバラクハ時ノホドニアラズ、ヒサシクトイフコヽロナリ。万葉云、

ホトヽギストバタノウラニシクナミノシバ〳〵キミヲミムヨシモガナ

是モ同心ナリ。新撰ニハ、ヨセクルナミノタチカヘリトアリ。

顕昭云、ワタノハラハ海底トカキテヨメリ。天ヲバアマノハラトヨミ、海ヲバワタノハラト云ナリ。シバ〳〵トハ数トイフ文字ヲヨム。シゲシトイフコトナリ。サレバシゲクミムトイフナリ。シバタツナミトモヨメリ。又万葉歌云、

タマツシマミレドモアカズイカニシテツヽミモテラムミヌヒトノタメ

カヤウニヨマルヽトコロナレバ、衣通姫モアトヲタレタマヘルニコソ。

［顕注］　和田原よせくる浪のしば〳〵もみまくのほしき玉つ島かも

しば〳〵もみまくほしきとは、しば〳〵とは万葉にも数々とかきたるはしげくと云事也。しばたつ浪といふも、しばなくと云も、しげき心なれば、しげくみんといふ心也。奥義万葉に、

郭公とばたの浦にしく波のしば〳〵君をみんよしもがな

しく浪とはしき波とて、しきりに立波也。それをもしば〳〵とよみたれば、此歌も同事也。又万葉歌に、

玉つ島みれどもあかずいかにしてつゝみもてこむみぬ人の為

かやうにみあかずして、つゝみもたんなどもよまるゝ所なれば、衣通姫も彼島に跡を垂て、玉津島明神とはいはれ給へるにこそ。

『和歌色葉』では傍線部「わたのはらとは海也」と顕昭『古今集注』に見られる説を述べた後、或云として点線部「しば

〳〵とはしばしなり。なみはやがてつづけてもたゝず、しばしはざまにありつゝたてば、しば〳〵といへりといふ」と『奥義抄』説を引用し、「いかゞときこゆ。」と批判している。続けて傍線部、「しば〳〵とはしきりなり。なみはたえずたつものなれば、しきりにもみまほしとそへいへるなり。」と『古今集注』や顕注に見られる顕昭説と同じ説を述べている。これは上覚が顕昭説と接していて、それをもとに『奥義抄』説を批判するようになったからではないだろうか。

四、『奥義抄』にないもの：九例

『和歌色葉』には『奥義抄』には見られない歌が九例ある。そのうち八七八「姨捨」は『大和物語』を引用している。六七[9]七「花かつみ」四〇七「八十島」は明らかに『童蒙抄』に拠るものと思われる。『奥義抄』『童蒙抄』になく、顕昭『古今集注』と顕注に当該歌はあるものの、顕昭『古今集注』や顕注とも異なる説明をしているものでは六一[10]がある。また、他の歌学書にないものでは一二五[11]がある。以上五例は顕昭説の影響とは思われないので省略し、顕昭説との関わりが想定できそうな四例について検討していくつもりだが、その中の八〇七「われから」は第Ⅱ節で触れるつもりなので、ここでは残りの三例を扱いたい。

1　『童蒙抄』或いは『袖中抄』『古今集注』などによるもの

一〇九五「つくばねのこのもかのも」は『童蒙抄』に加え、『袖中抄』『古今集注』の顕昭説が見られる。

古今集一〇九五

［和歌色葉］　六十つくばねのこのもかのもにかげはあれどきみがみかげにますかげはなし

これはひたちの国の歌也。彼国につくばねやまといふ山あり。他の山よりは木繁き山也。このもかのもとは、このおもてかのおもてといふ也。

［童蒙抄］　第三　地部　嶺

つくばねのこのもかのもに影はあれどきみがみかげにますかげはなし

古今廿にあり。常陸歌也。つくば山といふ山の、彼国にある也。さればかくよめる歟。此歌にはたゞの峯の名とは見えず。或人云、筑波山は八面あり。さればこのもかのもとは此面彼おもてと云也。

［袖中抄］　第十五　このもかのも

つくばねのこのもかのもにかげはあれどきみがみかげにますかげはなし

顕昭云、このもかのもとはこのおもかのおもと云也。おもとはおもて也。山はこなたおもてかなたおもてあれば、如此よめり。然に此歌は古今あづまうたの中の常陸歌也。彼国に筑波山あり。仍如此訓也。古今序云、仁流秋津洲之外恵茂筑波山之陰。すなはち此歌心也。公任卿注云、此山繁茂之由見たり。常陸国風俗歌中に、つくば山はやましげ山しげきをぞたがこもかよふしたにかよへわがつまはした

に

今案に、いづれの山にもこのもかのもとはよむにくるしみあるまじ。〻げきよしは其山にしたがふべけれど、おほやうは其も山と云ては強不可違。能宣歌云、ふるさとに秋ぞきにける佐保山のこのもかのも〻色づきにけり。〈以下「このもかのも」の例、略〉

［古今集注］　ツクバネノコノモカノモニカゲハアレドキミガミカゲニマスカゲハナシ

ツクバ山ハ、ヒタチノイヌヰニハベル山也。坂東ハアシガラノセキヨリカナタ、イトヤマナドハベラズ、ミナハルカナル野ニテ、木ナドミエヌニ、ヒタチノツクバ山ニユキイタリヌレバコカゲスゞシクメヅラシケレバニヤ、カゲアル山ニイヘリ。コノモカノモハ、コナタオモテカナタオモテトイフナリ。キミガミカゲトハメグミヲイフナリ。

［顕注］　つくばねのこのもかのもにかげはあれど君の御影をますかげはなし

つくばねとは筑波山也。常陸の国のいぬゐのかたに侍る山とぞ申。坂東はあしがらの関より東、いと山など侍らず。皆遙なる野にて木などもみえぬに、ひたちの国のつくば山に行いたりぬれば、木陰涼しく珍しければにや、かげある山にいへり。このもかのもはこなたおもてかなたおもてと云也。君がみかげはおほんめぐみをいふ也。古今序にも、あまねきおほんうつくしみのなみ、やしまのほかまでながれ、ひろき御めぐみのかげ、つくば山のふもとよりしげくおはしまして。真名序、仁流秋津洲之外、恵茂筑波山之陰。

『和歌色葉』では点線部「ひたちの国の歌也。彼国につくばねやまといふ山あり」と『童蒙抄』に拠るものが見られる。次の傍線部「このもかのもとは、このおもてかのおもてといふ也。」も『童蒙抄』に見られるが『童蒙抄』にある八面には言及していないので、同様に「このもかのもとは、このおもてかのおもてといふ也。」と述べていても八面に言及しない『袖中抄』『古今集注』など顕昭説の影響ではないかと考える。その間の「他の山よりは木繁き山也。」は、これまでの他の例のようなよく似た表現ではないが、顕昭『古今集注』と顕注に「木陰涼しく珍しければにや、かげある山にいへり。」とあり、何らかの形で顕昭説に接し、その影響で書かれたのではないかと推測する。

2　『古今集注』・顕注に見られる説によるもの

『奥義抄』にはなくて、顕昭『古今集注』と顕注に見られるものは二例ある。

古今集一〇九八　童蒙抄・袖中抄ナシ

［和歌色葉］　五十九　かひがねをねこし山こしふく風を人にもがもやことづてやらむ

かひがねとはかひのしらねなり。ねこし山こしとは、みねこえ山こえふく風とよめる也。人にもがもやとは、かの風を人にてもがなことづてやらんといへり。

［古今集注］　カヒガネヲネコシヤマコシフク風ヲヒトニモガモヤコトヅテヤラム

教長卿云、カクハルカニフクカゼヲツカヒニテ、コトヅケヤラムトナリ。ハルノ歌ニモ、風ノタヨリニタグヘテ、ウグヒスサソヒニヤラムナドヨメルタグヒナリ。清輔云、ネコシヤマコシトアルハ、ミネコエヤマコエフク風ト云也。人ニモガモヤトアルハ、カノ風ヲ人ニテモガナ、ミヤコヘコトヅケヤラムトヨメルナリ。人ハミチノマヽニヒカカズヲヘテユクニ、タヾチニスミヤカニユクベキ心ナリ。

［顕注］　かひがねをねこし山こし吹風の人にもがもやことづてやらむ

かひがねは同事也。ねこし山こしとあるは、みねこえ山こえふく風と云也。ねといふは山のたかき所也。みね也。やまこしは総じて山ひきなる所をも云ぺし。人にもがもやことづてやらんといふは、かの風を人にてもがな君へことづけやらんとよめる也。人は道のまゝに日数をへてゆくにたゞちに山ともいはず、すみやかに越行べき心也。

一〇九八「ねこし山こし」の「ねこし山こしとは、みねこえ山こえふく風とよめる也。人にもがもやとは、かの風を人にてもがなことづてやらんといへり。」は、顕昭『古今集注』に「清輔云」とあり清輔の説であったと分かる。顕注にも同様の記述がある。

古今集一六五　袖中抄ナシ

［和歌色葉］　十二　はちすはのにごりにそまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく

蓮は泥の中にあれども泥にそまぬなり。生死をば泥にたとへ、本覚をばはちすにたとふ。本覚は自性清浄にて生死の泥にそまざること、蓮泥にそまざるがごとしなる也。あざむくとはあざけるなり。詐の字をよめる也。

［童蒙抄］　第七　草部　蓮

はちすはのにごりにしまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく

古今第三にあり。僧正遍昭歌也。経云、不染世間法　如蓮花在水。さればいさぎよき心に、つゆを玉とあざむくとよめり。

［古今集注］　ハチスノツユヲミテヨメル　僧正遍昭

ハチスハノニゴリニシマヌコヽロモテナニカハツユヲタマトアザムク

ハチスヲバ、泥ノ中ヨリイデヽ、シカモニゴリニシマヌモノニイフナリ。法花経ノ文ニモ、不染世間法如蓮花在水トヽケリ。カノハチスノゴトク、キヨキコヽロニテ、アダナルツユヲタマトミルハ、マコトナラヌコトナレバ、アザムクニテアル也ト、教長卿ハ釈セリ。或人ノマウシハベリシハ、ハチスハ濁リニシマヌモノニテアルニ、イカニオケルツユヲバ、人ニハタマトミセアザムクゾト、ヨメルニモヤアラント云々。両義ヨク〳〵コヽロエエアハスベシ。ワガコヽロヲハチスニタトヘテ、ニゴリニシマズトイハンコ

トモ、アマリニ心ヲヤリテオボユル也。サレバハチスノコ、ロヲキヨシトイハンモアシカラズ。又ハチスノツユヲヨマンウタニ、ハチスヲバヨミナガラ、我心イハン事モ、イカゞトキコユ。

［顕注］蓮葉の濁にしまぬ心もて何かと露を玉とあざむく

あざむくとは、あざける心也。あざわらふと云もあざけり笑ふなり。にごりにしまぬ心と云は蓮は泥のうちより出て泥にしまぬ物なればいふ也。

一六五の傍線部「蓮は泥の中にあれども泥にそまぬなり」は、『古今集注』にも同様の記述が見られるが、顕注に「にごりにしまぬ心と云は蓮は泥のうちより出て泥にしまぬ物なればいふ也。」と、より『和歌色葉』に近い記述がある。また『和歌色葉』波線部「あざむくとはあざけるなり。詐の字をよめる也。」は、顕注の「あざむくとは、あざける心也。あざわらふと云もあざけり笑ふなり」と似ており、顕昭説の中でも、より『和歌色葉』の成立時に近い時期の顕注の説と共通する記述がある。

五、まとめ

以上をまとめると『和歌色葉』の古今集注釈は、多くを『奥義抄』に拠る一方、『袖中抄』や『古今集注』、顕注に見られる顕昭説の影響を受けているものが一〇一三「しでのたをさ」一〇九二「いなふね」六九七「ほがらほがら」九一二「しばしば」一〇九五「このもかのも」一六五「はちすはのにごりにそまぬ心もてなにかはつゆをたまとあざむく」一〇九八「ねこし山こし」後に述べる八〇七「われから」と八例見られ、その中に顕昭説を踏まえた『奥義抄』説批判が一〇九二「いなふね」九一二「しばしば」の二例見られる。以上から上覚は顕昭説に接していて、その影響を受けており、『和歌色葉』を執筆する際も顕昭説を意識していたと考える。

Ⅱ　顕注に見られる『和歌色葉』説

それでは顕昭の方は上覚の説をどのように捉えていたのだろうか。次に、顕注の中で『和歌色葉』の記述を意識したかと思われる例について考えていきたい。

古今集二〇八　童蒙抄　ナシ

［和歌色葉］十四わがやどにいなおほせどりのなくなべにけさふく風にかりはきにけり

いなおほせどりとは、古歌にさま〴〵よめり。或、秋田にむれはむとりとあり。或、あきたちてくるよしあり。或、にはたゝきといふ人もあれども、本草和名、兼名苑などいふゝみにこそは、よろづのものゝ異名、形をさへ明したるに、見たることもなし。順が和名には、にはたゝきをば鷽鴿又鶺鴿なんど書て、注には、日本私記云とつぎをしへとりとかけり。又別に稲負鳥と書て、注にそのよみをいなおほせとりとかきて、万葉集を引文にいだしたれば、ことりとみえたり。たゞしにはたゝきとぞみえたれども、いかゞ。或人はすゞめなりといへり。（山鳥といへり。）山

鳥稲あかみたるやうにて、尾ながなるいねをおひたるにゝたればいふなり。又かたぶく人もあり。なべにとはからになんといふ心なり。

［奥義抄］　我門にいなおほせ鳥のなくなへにけさ吹風に秋はきにけり

いなおほせ鳥古歌にさま〴〵に読り。或物には秋田にむれはむとあり、或は秋たちてくるよしあり。俊子歌には

さ夜深ていなおほせ鳥の鳴けるを君がたゝくと思けるかな

とあり。又古歌には

あふ事をいなおほせ鳥のをしへずは人を恋ぢにまどはましやは

ともあり。是に付て庭くなぶり（小書傍書：たゝき）と申人もあれども、本草和名兼名苑などいふ文には、よろづの物の異名かたちをさへあかしたるに見えたる事もなし。又順が和名には庭たゝきとは鷺鴿又鶺鴒など書て注には日本和記云とつきをしへ鳥とかけり。又別に稲負鳥と書て注に、そのよみいなおほせ鳥とかきて万葉を引文に出したれば、こと鳥と見えたり。順しらざらめやは。但彼古歌にては庭たゝきとぞ見え侍れども、順がわきまへざらむ事を今の世にさだめがたし。

［袖中抄］　第二十　いなおほせどり

我門に　いなおほせ鳥の　なくなへに　けさふく風に　かりはきにけり

顕昭云、いなおほせどりとは、ふるくとかくいひたれど、たしかにみえたることなし。秋の田になくよしをよめり。さる鳥のはべるにこそ。是は古今読人不知歌也。又、古今にある歌は惟貞親王家歌合忠峯詠也。やまだもる　秋の仮廬に　おくつゆは　稲負鳥の　涙なりけり　此歌は、菅家万葉集にもいれり。第五句は、なみだなるらん。

〈以下、他の歌学書の引用。中略[12]〉

案云、にはたゝきといひつべし。然而本歌二首は入古今。あふことをゝしふる歌は不知定説之上順和名序云、或挙類聚国史、万葉集、三代式等所用之仮字。水獣有葦鹿之名、山鳥有稲負鳥之号。野草之中女郎花。海苔之類、於期菜等是也云々。

二〇八「いなおほせ鳥」の『和歌色葉』の記述は、点線部は『奥義抄』の引用で、そのほとんどを『奥義抄』に拠っているが、続けて『奥義抄』に見られない説「或人はすゞめなりといへり。（山鳥といへり。）山鳥稲あかみたるやうにて、尾ながなるいねをおひたるにゝたればいふなり。」を述べている。

この二重傍線部分について、顕注でもはじめに点線部『奥義抄』説を引用し、続けて二重傍線部「或は山鳥といへり。鳥のすがた稲負たるにぞ似たる**といへど、それも山鶏の外にあげたれば、別物とみえたり**。」と『和歌色葉』が述べる「山鳥」説を否定している。続けて「順和名に、山鳥に稲負の有といへる、総じて水獣に蘆鹿の号有といふにむかへて山の鳥と云也。山鶏にはあらざる歟。所詮稲負鳥と云物の侍る歟。」と「山鳥」

説を否定する根拠を述べている。これは『袖中抄』の「案云」に、「水獣有葦鹿之名、山鳥有稲負鳥之号。野草之中女郎花。」とある。顕昭は、この『袖中抄』の記述を上覚が誤って捉えたと推測し、顕注で『和歌色葉』の誤りをただそうとしたのではないだろうか。

古今集七三一　童蒙抄・袖中抄　ナシ

［和歌色葉］　三十四　かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人みればそでぞひぢぬる

かげろふといふむしはありともなくなしともなく、たしかにもみえぬものなれば、それかあらぬかとたとへむとて、かげろふとはおけり。この虫はとうばうのちひさきやうなる物の、春の日のうら〳〵とあるに、ものゝかげなんどのやうにて、ほのめくなり。六帖歌云、

つれ〴〵の春日にまがふかげろふのかげみしよりぞ人はこひしき

まがふとはまぎるゝなり。ふる人といはむとてはるさめとはおけり。そでひづとはかみにいふがごとし。

［奥義抄］　かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとみれば袖ぞぬれける

かげろふといふ物は、ありともなくなしともなく、たしかにも見えぬ物なれば、それかあらぬかとたとへむとてかげろふとはおけり。ふる人といはむとて春雨とはおけり。むかしの人みれば袖ぬるゝと読る。

［顕注］　かげろふのそれかあらぬか春雨のふるひとみれば袖ぞひぢぬる

かげろふと云物は、有ともなく、なしともなく、たしかにもみえぬ物なれば、それかあらぬかとたとへむとて、かげろふとはおけり。かげろふは詩にも歌にもさま〴〵にいひて、ひとすぢならず。遊糸をも云。是外遊糸或有無ともつくれり。野馬は遊糸とは同物ともいへり。又蜻蛉をかげろふと云り。又あきつむしとは、とばうをも云。とばうをば、えんばとも云。それはちいさくて青色にて羽をせなかにひと所にするて、物にゐるむしともみえたり。或は春夏の木の下にかげろふ虫ともいへり。されどそれは蚊と云むし也。ふるひといはむとて春雨とはおけり。むかしの人みれば、袖ぞぬるゝとよめる也。

七三一「かげろふ」について、『和歌色葉』は点線部のように、多くを『奥義抄』に拠っているが、その中に『奥義抄』に見られない「この虫はとうばうのちひさきやうなる物の、春の日のうら〳〵とあるに、ものゝかげなんどのやうにて、ほのめくなり」という説明がある。この「とうばう」について、顕注では「又蜻蛉をかげろふと云り。又あきつむしとは、とばうをも云。とばうをば、えんばとも云。それはちいさくて青色にて羽をせなかにひと所にするて、物にゐるむしともみえたり。」と明確に定義している。「とうばう」は『和歌色葉』と顕注以外のこの時代までの現存する歌学書には見あたらない。そこで顕昭は『和歌色葉』の「とうばうのちひさきやうなる物」とい

う記述について、『和歌色葉』の読者に誤って受け取られないよう、「とうばう」について正確に記述する必要があると考えたからではないだろうか。

古今集八〇七　奥義抄・童蒙抄・袖中抄・古今集注ナシ

［和歌色葉］　六十一あまのかるもにすむゝしの我からとねをこそなかめよをばうらみじ

これは伊勢物語の歌也。われからとは、海のもやめなんどにちひさきえびなんどのやうにてつきたるむしを云ふなり。わがみのとがなんどいはんとてそへたる也。

［拾遺抄注］　キミヲナホウラミツルカナアマノカルモニスムムシノナヲワスレツ々　〈拾遺抄三三四・拾遺集九八六〉

古今歌ニ、

アマノカルモニスムムシノワレカラトネヲコソナカメヨヲバウラミジ

此歌ヲ為本如此読也。藻ニスム虫ヲバワレカラト云ナリ。ワレカラトイフ名ヲワスレテ、ナホ人ノツラキヲウラムト読ナリ。ソノワレカラハ、チヒサキ蝦ナリ。然者貝ツ物ニテゾアルベケレド、モニスムムシトヨミタレバ連歌ニハ虫ヲ用ナリ。又アミト云物アリ。其モチヒサキエビナリ。然而海ノ糠魚ト書キテ、順和名ナドニモ魚部ニイレタレバ、連歌ニハ魚ニモチヰルナリ。如此コト能々可有斟酌コトナリ。

［顕注］　あまのかる藻にすむ虫の我からはねをこそなかめ人はうらみじ

もにすむ虫のわれからとは、和布・のりなどにつきたるこかひをばわれからと云とかや。我からつきたるゆゑに、そのめ・のりなどはあぢはひよかるべしといはむ心におもひあてたるあらまし事なるべし。げにともおぼえず。そのこかひなどのめ・のりのあぢはひにまさるべきにあらず。あまのかるもは、大かた海藻はいづれもあまもくひ、人にもあたふる物なれば、いづれとかぎるべからず。又とりわきて玉藻などよむ物も有。それをとるをば藻かり舟ともよめり。それにつきたる貝津物も侍べし。

八〇七「われから」も『奥義抄』『童蒙抄』『袖中抄』『古今集注』には見られないが、顕昭『拾遺抄注』に「そのわれからは、ちひさき蝦なり。然者貝つ物にてぞあるべけれど、もにすむむしとよみたれば連歌には虫を用なり。又あみと云物あり。其もちひさきえびなり。」とあり、『和歌色葉』の「ちひさきえびなんどのやうにてつきたるむし」はこの顕昭説に拠るかとも考えられる。一方顕注では「もにすむ虫のわれからとは、和布・のりなどにつきたるこかひをばわれからと云とかや。」「それにつきたる貝津物も侍べし。」と述べているが「えび」には言及していない。これについて、かつて『拾遺抄注』を執筆した時点では顕昭は「われから」を「えび」と捉えていたけれど、顕注を執筆する時点では「えび」ではなく「こかひ」「貝津物」と捉えるように考えが変化していったからではないだろうか。

以上三例、いずれも上覚が顕昭説を学んで書いた記述につい

て、顕昭自身が上覚の誤解などに気づき、顕注において訂正しようとしたのではないかと推測できる。このことから、顕注執筆時の顕昭が『和歌色葉』を意識していたと考える。

結

以上を踏まえ、建仁元年以降、顕昭が、新たな古今集注釈を執筆したきっかけについて、建久九年に『和歌色葉』を閲覧した顕昭が、顕昭自身の説の影響による『奥義抄』説批判と接し、改めて『奥義抄』説を見直す必要を感じ、顕昭自身も『奥義抄』をすべて含む古今集注釈を志すようになったのではないかと推測する。あるいは建久年間のどこかで顕昭は新しい古今集注釈を執筆し始めていて、その過程で『和歌色葉』を閲覧して影響を受けたのかもしれない。いずれにしても、『奥義抄』説をすべて含み、典拠を明確にするよりは一首の内容をわかりやすく説明することねらったと思われる、今までの顕昭のスタイルとは全く異なる新たな古今集注釈、顕注の執筆に『和歌色葉』の閲覧は影響を与えていたのではないかと考えている。

―了―

注

(1) 久曾神昇「解題五、古今集注」(『日本歌学大系　別巻四』風間書房　一九八〇年)

(2) 久曾神昇「解題三、顕注密勘抄」(『日本歌学大系　別巻五』風間書房　一九八一年)

(3) 拙稿『顕注密勘』の顕昭注の成立時期について」(『中世文学』第五五号　二〇一〇年)

(4) 『和歌色葉』の成立後、顕昭が閲覧したのは、建久九年(一一九八)か。(黒田彰子「和歌色葉奥書再読―上覚と長房兄弟―」『中世和歌論攷―和歌と説話と―』の整理による)

(5) 久曾神昇「解題　和歌色葉」(『日本歌学大系　巻参』風間書房　一九五六年)

(6) 黒田彰子「和歌注釈をめぐって―和歌童蒙抄と和歌色葉―」(『中世和歌論攷―和歌と説話と―』和泉書院　一九九七年)

(7) 『奥義抄』に『童蒙抄』を追加したものは次の二例。

・十八「とぶひの」・巻末「ささがに」

この「巻末」とは、『和歌色葉』古今集注釈箇所のなかで、いったん巻二〇まで注がつけられた後に追加された箇所をさす。「巻末」には『童蒙抄』の影響が色濃いので、巻二〇までひと通り注を付けてから改めて『童蒙抄』を確認した、など何らかの事情があったのかもしれない。

(8) あと一例は、明らかに『童蒙抄』によるもので、巻末九六一「ひなのわかれ」

(9) 六七七「花かつみ」・四〇七「八十島」ともに、注(7)で指摘した『童蒙抄』の影響の濃い巻末箇所にある。

(10) 古今集六一の注については以下の通り。

古今集六一　童蒙抄・袖中抄ナシ

[和歌色葉]　五　さくらはな春くはゝれるとしだにも人のこゝろにあかれやはせぬ

是は閏三月に伊勢がよめる歌也。あかれやはせぬといへるは、あくべきにあかれずと云ふことば也。譬ば不問ぬを不恨すとかきたらば、とはぬのぬも不也。うらみずのずも不なれば、不為と書きてはとはぬのせぬともよみ、せずともよむべければ、あかれやはせぬはあかれやはせず也。あかるゝにはあらず。もじのやまひの段にもこの詞をばいへり。又ふるき物語なんどにおほくこの詞あり。又天神の御託宣にも、我天台の証分を申とゞめたりしつみをのがれんがために、我住まん所に三昧堂をたてゝ、大法のほらをやはふかせぬ、とをほせられたる

は、ふかすべきにふかせずといふ御ことばにて、北野にいはひはじめたてまつる時、法花三昧をばをかれける也。だにもとよめる詞もその心なきにしもあらず。又躬恒歌、

ほとゝぎすこゑもきこえぬやまびこはほかになくねをこたへやはせぬ

とよめるもこたふべきにこたへずといへる也。

[古今集注] ヤヨヒウルフヅキアリケルトシヨミケル　伊勢

サクラバナハルクハヽレルコトシダニヒトノコヽロニアカレヤハセヌ

ヤヨヒハ三月ナリ。風雨アタヽカニテ草木弥生故ニ、イヤヨヒ月トイフヲ、詞ヲ略シテヤヨヒト云也。抑此歌ハ、諸証本皆同ク、人ノコヽロニアカレヤハセヌトハベリ。新院御本ニゾ第三句ヲトシダニモト侍ル、其ハ同心也。而テ俊頼朝臣ガ許ニ侍ケル本ニ、アカレヤハスルト侍ケルトテ、アカレヤハスルトイヘルコソ、イハレタレ、イカヾハアカレヤハセヌトハイフベキ。花ヲアカバコソハ、サハヨマメト人々マウスモハベメリ。イト〳〵クチヲシキコト也。上ニ春クハヽレル年ダニモトイヒテハ、アカレヤハセヌトイヒタルコソメデタケレ。アカレヤハスルトイヒテハ、上ノダニトイヘル詞ニアヒカナハズ。アカレヤハセヌトイフハ、ヤガテアカレヌ心ナリ。春ノクハヽレルトシダニ、ナドアカレヌゾトイフ也。上ノダニノ詞ヲオモハズシテ、末ノセヌ、スルノ論ヲイタス人々ハ、トモニ此歌ノ始終ヲサトラヌナリ。俊恵ナドモスルト云義ヲ執シ侍キ。甚以遺恨云々。

[顕注] 桜花春くはゝれる年だにも人の心をあかれやはせぬ

此歌のをはりの句は、通宗朝臣が証本にも、あかれやはせぬと有り。崇徳院の御本にも同侍り。第三句を年だにもと侍、同詞ばかりはかはりて侍れど、終句はたがふ事なし。而俊頼朝臣家本に、あかれやはすると有りけるとぞ。俊恵は其義を執し侍き。凡世人も別々執しきあひて侍めり。両証本につきては異議あるべくもなし。上にことしだにもと云、年だにもと云ては、あかれやはするとはいふべくもなし。次第あひかなはぬを、あかれやはせぬといふはいはれずと申人は、返す〴〵くちをしき事と覚侍き。春くはゝれる年だに人の心にはなどあかれぬぞ、あかれよかしと云心なり。此集夏部に、躬恒が待郭公歌、

郭公声聞えずあまびこは外に鳴音をこたへやはせぬ

此歌の詞づかひも同事也。あまびこは山彦也。こだまとも云。又春桜のとく散侍けるを、貫之がよめる歌

ことならばさかずやはあらぬ桜花みる我さへにしづ心なし

此さかずやはあらぬといへるも、さかであれかしとよめる詞也。是にておもひあはすべき也。又十九巻に、

ことならばおもはずとやはいひはてぬなど世中の玉だすきなる

これもいひはてよかしといひたる詞也。

六一は顕昭『古今集注』顕注ともに「あかれやはせぬ」「あかれやはする」の本文のどちらがよいか、というところに重点が置かれているが、『和歌色葉』は「あかれやはする」には言及していない。ただ「あかれやはせぬ」の説明の中で上覚が引用した躬恒のほとときすの歌を、顕昭は顕注の中で使用しているので、六一については、一〇一三と同様に現存していない顕昭説を上覚が取り入れた可能性、あるいは『和歌色葉』に刺激されて顕注の中で「あかれやはせぬ」の説明のために和歌を引用した可能性、いずれにせよ、顕昭と『和歌色葉』説の間に何らかの影響関係が想定できるように思われる。

(11) 『和歌色葉』古今集一二五の注は以下の通り

六　かはづなくゐでのやまぶきさきにけりあはましものを花のさかりに

かはづとは上にいへり。ゐでのやまぶきとは、或書云、昔橘大臣諸兄ゐで寺をつくりて、金堂の四面の廻廊のめぐりに款冬をうえて、廊のうちに水を湛て花さかせて水にうつしてみるべきやうをかまへたりけるに、寺供養日おもはざるに讒言をおひ

てみまかりにければ、やまぶきの花を水にうつしてみる事もなくてやみにけることをよめる也云々。或人云、軽大臣、玉ゐの光明寺をつくりてやまぶきをうゑたりけるに、その堂を丙宣（マヽ）の日供養したりける故に唐土にわたりたりけるか、灯台鬼につくられたりけるかといひつたへたり。諸兄とはきゝをよばずと云々。

（12）

『袖中抄』の中略箇所は以下の通り。

綺語抄云、いなおほせどりは、にはたゝきなり。

倭語抄云、山田によるやあかつきなどなくとり也

無名抄云、いなおほせどりとは、しれる人なし。にはたゝきといへる鳥なめりと云る人あり。おしはかりごとなめり。此にはたゝきと云る鳥はとつぎをしへる鳥とぞ申なり。それにつきてこゝろある歌

あふことを　いなおほせどりの　をしへずは　ひとをこひぢに　まどはざらまし

此歌を彼鳥の名におもひあはするなめり。すゞめと申人あれど、すゞめは常にあるとりなれば、いまはじめてなくなへになどおどろくべき事にもあらず。

奥義抄云、古歌に、さま〴〵によめり。或は秋田にむれはむとりなり。或は秋たちてくるよしあり。俊子歌には

さよふけて　いなおほせどりの　なきけるを　きみがたゝくと　おもひけるかな

又、あふことをゝしふともあり。これにつきて、にはたゝきとまうす人もあれども、本草和名　兼名苑などいふゝみこそは、よろづの物の異名かたちをさへあかしたるに、みえたることもなし

又順が和名には、にはたゝきをば鷽鶴鴾などかきて注には、日本私記云、とつきをしへとりと書り。又別に稲負鳥と書て注に、そのよみ、いなおほせどりと書て、万葉をひき、文にいだしたれば、こと鳥とみえたり。順しらざらむやは。但此古歌にては、にはたゝきとぞみえはべれども、順がわきまへざらむ事をいまのよにさだめがたし。

私考日本紀云、〈以下この項ルビ略〉一書曰、陰神先唱曰、善哉善小男、時陰神先言故為不詳。更復改巡則陽神唱曰、善哉善小女。遂将合交。而不知其術。時有鶺鴒。飛来揺其尾二神見而学之。即得交道。同記公望注云、鶺鴒、師説つゝまなはしら。或説とつぎおしへどり。又説にはくなぶり。安氏説つゝなはせどり。

○『和歌色葉』は『校本和歌色葉』（黒田彰子編著　一粒書房　平成二八年）の静嘉堂文庫本を使用し、濁点を付し、漢字・仮名遣いなど通行のものに改めた。

○『奥義抄』は『大東急記念文庫善本叢刊』を使用。

○『袖中抄』は『袖中抄の校本と研究』（橋本不美男・後藤祥子著　笠間書院）を使用し、片仮名を平仮名に改めた。

○『顕注密勘』は内閣文庫本（２００―５５）を使用し、句読点・濁点を付し、和歌の引用箇所は二字下げて改行、仮名遣い・漢字などは通行のものに改めた。

○ほかは『日本歌学大系』を使用。

【付記】本稿は平成二八年中世文学会春季大会の口頭発表をもとにしている。その折御教示下さった先生方に深く感謝するとともに、口頭発表が決まったのち、いまだ拝眉の栄を得ていない黒田彰子先生から『校本和歌色葉』を恵送賜ったこと、ここに記して心より御礼申し上げたい。

（にった・なおこ）